

●人に癒やし与える地

水と緑の町・綾を代表するのが照葉樹林である。照葉樹林帯はヒマラヤの中腹から中国南部、台湾を経て北上。また朝鮮半島南部から日本へと東進している。本州の以西が照葉樹の自然植生地帯とされている。しかし、自然破壊が進み、現在南九州で保護されているのは、綾町の約千七百畝を中心とする一部分という状態である。

照葉樹林帯の生態系は三段階に分けられる。カシ、シイ、タブ、イス、クスなど八メートル以上の高木樹木。ヤブツバキ、モッコク、ヤマモモ、ユズリハなど三メートルから八メートルの亜高木。そしてサツキ、ヒサカキ、サザンカなど三メートル以下の低木で、いずれも葉っぱの表面が光沢を保ち、太陽の恵みを樹木の活力として取り込んでいる。

綾町では照葉樹林の自然生態系を保護し、樹林を守ることを目的に毎年、照葉樹文化を考えるシンポジウムを開いている。一九八五（昭和

六十）年三月三十日、当時の郷田実町長が第一回のシンポで全国初の「照葉樹林都市宣言」を行い、注目された。

その後、同町が「照葉樹林の町」構想を基に進めてきたのが「綾の照葉大吊橋」「照葉樹林文化館」「綾城」などである。今では年間百三十万人もの観光客が町を訪れ、隠れた自然保護の学習地になっている。

特に日本有数の照葉樹林帯と、美しい渓谷美のハイライトが権屋、岩下、川中、千尋地区。一帯には日本名水に選ばれた湧（ゆう）水群が点在している。名水は照葉樹林帯から生み出される命の水でもある。

なかでも、世界一高い歩道つり橋として一躍有名になったのが高さ百四十二メートル、長さ二百五十メートルの「綾の照葉大吊橋」。風速百メートルに耐えられる設計と、千七百五十人が一度に渡っても大丈

夫という安全性の高いつり橋で、新しい観光スポットになっている。

また、こうした綾町の取り組みに対し、国などから日本の自然百選「九州中央山地国定公園」、日本名水百選「綾川湧水群」、森林浴の森百選「綾渓谷の照葉樹林」など数多い賞が贈られている。ふるさとづくり大賞、旅のまち三十選にも選ばれている。

そうした中で「綾の照葉樹林を世界遺産に」という保護運動も始まっている。

今、豊かさとは何か、人間が生活をするうえで何が大切かが求められている。綾町はそれらを教えてくれる、癒やしの地でもある。

三又 喬



照葉樹林。世界遺産としての保護運動も高まっている